

目的 生活雑排水，とりわけ洗濯排水による水質汚濁への影響は質量ともに大きく、速やかな改善が待たれている。こうした中で家庭用合成洗剤に含まれる蛍光増白剤（以下FBAと略称する）は、現状では一次汚濁の原因となる有害物質との判断は下されていないが、大量使用が憂慮される物質であろう。この使用量を還元していく方法として、洗剤中の含有量を制限するような社会環境を醸成していく、洗濯中にできるだけFBAを被服に吸込させる工夫をする等が考えられるが、ここでは前者の教育面からの還元を試み、その第一段階として対象を学生に絞り、その実態と意識，教育効果等を検討した。

方法 高知大学家庭科教材研究受講生54人を対象に質問紙調査を行った。（80.11.13実施）その内容は環境汚染と洗濯の関係をどう捕らえるか、実生活中での洗濯に関する行動，及び蛍光強度の異なる試料布（生成りを含めて6水準）の中から好みの白さを選択させるところの白さ嗜好の調査からなっている。

結果 まず洗濯行動に関して8割は自分で洗濯するが洗剤を計量して使用する者4割，粉石鹼を見たことのない者4割，使用経験者3割。一方、環境保全の立場から生活が不便になることを厭わぬ者が9割あるのに、ふきんとタオルを一緒に洗ったり（4割），衣類や洗剤購入時に品質表示未検討が5割，香りの良さのみで洗剤購入するが約4割と自覚がない。また試料布を使用した白さ嗜好調査では、蛍光強度の大きいものが好まれる（約4割）一方で生成り指向も2割と一定の傾向はみられないが、身のまわりの製品に関しては肌着，タオル，ふきんの順で白さを追求する傾向がみられ、白さ指向を示した。